

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



お嬢さまといっしょ

◆麗華とミリアとママいいことどり◆

小説 山本沙姫
挿絵 中乃空



登場人物紹介

Characters



よろしくねー。恭一お兄ちゃんっ！

じんぐう じ
神宮寺ミリア

神宮寺家の次女。人懐っこく、元気
いっぱいの妹系お嬢さま。恭一のこ
とを「お兄ちゃん」と慕ってくる。



わたくしはまだ
結婚相手を決めるつもりは
ありませんので

じんぐう じ れいか
神宮寺麗華

神宮寺家の長女。ちょっと高飛車だ
が、動物の前では可愛い表情を見せ
る一面も。乗馬とバイオリンが趣味。

お姉ちゃんときスするの、嫌？



さるわたりきょういち

猿渡恭一

本作の主人公。庶民の家柄だが、何の因果かセレブなお嬢さまたちの婚約者候補になってしまう。

さくらがわこういち

桜川幸一

恭一の親友の御曹司。許嫁を決められそうになり、恭一に相談する。

み たむらさとこ

三田村聡子

幸一に仕えるメイド。実は主人である幸一と相思相愛である。

じんぐう じりょうぞう

神宮寺良蔵

神宮寺家当主。「サムライコンダクター」の名で知られる指揮者。

じんぐう じ さ よ こ

神宮寺沙夜子

神宮寺家の若奥さま。後妻であるため、麗華とミリアとは血がつながっていない。実は恭一の幼馴染み。

プロローグ

第一章 夏休みのはじまりに……

第二章 若奥さまとの秘め事

第三章 優雅な音色に惹きつけられて

第四章 金髪少女の甘い罠

第五章 ツンツンお嬢と馬に乗って……

第六章 ツインテ少女とママサンドイッチ

第七章 お風呂で並んで……

エピローグ

救急箱を柵にしまい、再び目の前に戻ってきた彼女は目をそらし、頬を朱に染めてたどたどしい口調で話しかけてくる。しつとりと落ち着いた雰囲気醸し出していたあこがれのお姉さんが、恥ずかしげにオドオドする姿は実に新鮮。

(さよ姉ちゃん……こんなに可愛い顔するなんて……)

あまりの愛くるしさに、ついいつまでも見入ってしまったくなるのをグッと堪えて、彼はおもむろに口を開く。

「ごっ、ごめんなさい。ぼく道に迷って、そうしたら何か明かりの点いてるドア見えて、それで、さっ、さよ姉ちゃんが無苦しいような声出してるから……強盗にでも、襲われてるんじゃないかって……」

顔をゆでダコのように真っ赤に火照らせて、恭一はたどたどしい口調で自分が部屋を覗いていたわけを説明した。ウソはついていないが、言っている当人にもへたな言い訳のようには聞かえない。

「……それで、わたしを助けようとして中を覗いて……その、見惚れちゃったの？」

彼の話を聞いて、沙夜子は胸元で指先を恥ずかしげに擦りあわせながら、モジモジとはつきりしない口調で問いかけてくる。

「う、うん……だって……さよ姉ちゃん、すごく綺麗だったから……」

「そう……いいわ、許してあげる。でも麗華とミリアにはナイショよ、ねっ」

ちゃんと彼のほうを見て、両手を拝むように合わせると少しおどけた感じの口調で沙夜子は覗きを許してくれた。しかし言葉の端々が震えていて、微かに動揺が感じられる。

「も、もちろん、誰にも言わないって。それにしてもさよ姉ちゃん、良蔵さんのことが本当に好きなんだね。羨ましいよあの人が……ははっ、なんちゃって」

まだ心が落ち着かない彼女の気分を変えさせようと、恭一はあえて生意気な口ぶりでか
らかつてみた。

「もちろんよ、わたしの大切な旦那さまですもの。あー、ひよつとしてキョウちゃん、良蔵さんにヤキモチ妬いてるのかなー？」

よほど彼の態度がおかしかったのか、沙夜子は手で口元を隠し、クスクス笑いながら答える。しかし、彼女の言うことはある意味的を射ているだけに、ほんの少しだけ辛い。

「まさかー、そんなこと……ないよ……」

長年恋焦がれてきた初恋の人をとってしまった相手に、妬かないわけがない。それを悟られないように明るく振る舞ってみせても、どうしても口が重くなってしまふ。

……ほんの少しでも、その思いが自分に向けられていたら……。

(もう、あの日のことなんて忘れてるだろうな……)

昼間に話して以来、幾度となく成長した自分を褒めてくれるのに、自分とは違う男の妻になっていく現実。しかたがないことなのに、わがままな悔しさが心に滲む。

「……ところで……キョウちゃん。約束、覚えてるかしら？」

「え？ や、約……東……」

ところがいきなり振られた話に、嫌な気持ち振り払われるほど大きく胸が高鳴る。子供の頃に、彼女と交わした約束はそれこそ覚えきれないほどあつたはず。でも、おとなになっても忘れられないものはただ一つ。

「あ、まだ小さかったから……覚えてないわよね、ふふっ……キョウちゃんったら、引越しの日にね……」

「おとなになつてまた会えたら……ぼくのおよめさんになつてくれる？」

楽しそうに昔話を語りはじめた沙夜子の声を遮るように、恭一はあの日と同じ言葉を口にする。かけがえのない思い出を共有できた嬉しさに、ほんの少し目を潤ませて。

「……ええ、いいわよ」

「え？ 違うよー。あの時、さよ姉ちゃんは『その時にキミが優しくて立派なおとなになつたら、考えてもいいわよ』つて言ったんじゃない」

さつきからかった仕返しに、わざと答えを間違えたと思つた恭一は無邪気な子供のよう
に笑いながら正解を告げる。

「そう、あの時はね。だから今の答えは違うのよ」

「今の答え？ どういうこと？」

「鈍いわねえ。今だけは、あなたのお嫁さんになってあげるってことよっ！」
ちゅっ！

弾けるクラッカーのように明るく呼びかけてきた沙夜子は、彼女の言うことに戸惑う恭一の頬を両手で押さえつけ、強引に口付けしてきた。勢いあまって、もつれあうようにベツドにボフツと倒れ込むほどの強さで。

暖めたマシユマロを張りつけられたような、フワフワとした感触が唇全体を覆いつくす。「んくっ、んっ、んくんっ……キ……キョウ、ちゃあん……」

そして触れあう唇の隙間から湿っぽい音を立てながら前歯が抉じ開けられて、粘液を纏った生暖かい舌が口腔内に入ってきた。

生暖かい柔肉は、ついさっきの肉欲の舞で見せた腰の動きに負けない激しさで、いきなりのキスに戸惑う少年の口の中を蠢き回る。

舌を舌で巻き込むように絡みつけたり、少しザラついた表皮で頬の内肉や歯茎を磨くように擦ったり。若奥さまの情熱的な口奉仕に、恭一はまたしても度肝を抜かれた。

(さ、さよ姉ちゃんが……ぼくに、キスを!?)

子供の頃に何度も体験した、おでこや頬にチュツとされた軽いキスとは違う本当のファーストキス。レモンか青いリンゴをかじったような、甘くて酸っぱい感触が口の中いっぱいに広がっていく。頭の中に、桃色の靄がかかったようなぼんやりとした感覚とともに。

同時に、舌先が触れた部分が熱い温泉に浸かった時の肌のように火照り、そこから湧き立つ心地いいむず痒さが、愛欲をかき立てる電気信号となって股間へ向けて絶え間なく突き抜け続けた。

「……んんんっ、ぷっはあっ……はあっはあっ、さっ、さよ姉ちゃん……」

「ふうっ……どうかしら？ おとなのキスの味は」

一旦口を離して、沙夜子は手の甲で口元を拭いながらイタズラっぽい笑みを浮かべて感想を聞いてくる。頬を朱に染めて、潤んだ赤い瞳をキラキラと輝かせた表情が色っぽい。

「どっ、どうして？ 愛している人がいるのに、ぼくにこんなことを？」

幼い頃に大切にされ、そして昨日再会して以来ずっと優しくしてくるさよ姉ちゃん。でもそれは弟としてだと思っていただけに、こんなに激しくキスされる理由がわからない。「どうして？ それは……約束を守って立派なおとなになったキョウちゃんにご褒美、かな。それともキョウちゃん。お姉ちゃんとキスするの、嫌？」

「ううん……嫌だなんて、そんなことないけど……」

「そう言ってくれると、お姉ちゃん嬉しいわ……」

照れ臭そうに笑いながら語りかけると、沙夜子は腰に手を伸ばす。そして細い親指を、ズボンに引っかけた。

「えええっ!? ちよっ、な、何……」

スルリッ……ブルンッ！

パジャマのズボンが下に穿いたブリーフもろとも引きずり下ろされ、押さえを失った弓なりにそそり立つ肉棒が勢いよく飛び出した。

「うそっ！ キョウちゃん……こんなにすごいなんて……」

幼い頃から比べれば、ドジョウとコブラほども差があるかと思えるほど成長した男根を目にした瞬間、沙夜子の顔が火を噴くように「ポッ」と真っ赤に染まる。

(……さ、さよ姉ちゃんに見られてる。こんなに、可愛い顔して……)

日頃、夫のモノを見慣れているはずなのにまるで始めて男性器を目の当たりにした少女のような初々しい反応について興奮してしまい、充血した肉柱が大きくしなった。

大きく見開かれた赤い瞳から放たれる、驚きと好奇心に満ちた視線がピンピンにいきり立ったペニスに絡みつく。咄嗟に手で隠そうとしても、根元を掴まれてしまつては隠しようがない。

これまで恋人などできたことのなかった童貞少年にとって、勃起した己が分身を人に見られるなどなかつたこと。ましてやずっと離れ離れになっていた、あこがれのお姉さんに披露することになるうとは想像もできなかつた。

恥ずかしさと心地よさが入り混じつたような、複雑な気持ちが湧き立って、胸の中をくすぐる。

「い、いやその……んんっ！」

いきなり大事などころを見られてどう反応していいか困る恭一にかまわず、沙夜子は薄紅色の唇を開き、真つ赤に熟したイチゴのような亀頭をほおばった。その瞬間、敏感な表皮の中を強烈な痺れがピリッと走り、全身が硬直する。

くちやくちゆくりゆくりゆ……ちゅっ、ちゆるっ、ちゅちゅちゅちゅーつつ……。

さらに続けて長い舌で火照った皮膚を舐め回され、唇で揉み扱かれると自分の手では得られなかつた快感が、じんわりと皮下の神経にまで染み込んできた。

亀頭に張りつく、頬の内肉のゼリーのような柔らかさ。小刻みに震えさせて表皮を撫で回す舌先の、痺れるような刺激。そしてサウナを髣髴とさせる口腔内の熱さ。そのすべてが渾然一体となって、津波のように股間の中を駆け巡っていく。

「んんんんんっ……はうんっ……キョウちゃん……オチン、チン……すぐく、熱い……」
硬く目を閉じて頭を上下に揺すり、必死に気持ちよくさせようと呻えた男根をこね回す姿が、ぼやけた視界に映る。

(さよ姉ちゃんが……ぼくのを……)

今や人妻となり、二人の娘もいるかつてのあこがれのお姉さんが、己が一物に口で奉仕してくるといふ、本来許されざる情事。しかしそれをわかっていても、恭一には抗うことができなかった。



成長するにつれて性に目覚め “はじめての人が沙夜子だったら” と思つていた妄想が、現実となつたのだから。いや、むしろ彼女が既婚者となつてゐることが、より一層喜びを高めてゐるとも言える。遠くへ行つてしまつた初恋の人を、取り戻せたような気がして。にちゅつにちゅつ、くりゅつくりゅつくりゅつ……。

「ううっ、もっ、もう……でっ、出る、出ちゃう……離れて、さよ姉ちゃん……」

限界が近づいてきた恭一は、彼女に白濁液を浴びせたくない一心で離れるように呼びかける。しかし愛しいお姉ちゃんは弟のように愛おしい少年、いや、今は旦那さまと呼びたい立派な男性となつた彼を離さない。最後まで気持ちよくしてあげたいから。

固く張つた表皮を揉む唇と、ペロペロと舐め回す舌にますます情熱がこもり、まるでアイスクャンディーを舐め溶かすように彼の心から遠慮という名の邪魔者を消し去っていく。

「もごっ、いっ、いいよ……お姉ちゃん、れるっ、ぜっ、全部……んくんくっ、飲んで、あっ、あげる……んんっ……」

「だっ、だめっ離して……んあっ！」

どびゆるるっ！ どくんどくんどくどくどくどくっつっつ……。

咄嗟に腰を引いて口から男根を引き抜こうとしたが、間に合わず口内射精してしまつた。柔らかな頬の内側が、熱湯のように熱い愛欲の証でタプタプと満たされていく。

「んっ、んくっ、こくんっ……」

口の中いっぱい広がる苦さと熱さに怯むことなく、沙夜子は喉をコクコクと鳴らしながら頬に溜まったスベルマを飲み干すと、舌先でエラの下や先割れの中まで丹念に舐め回しはじめた。長い睫毛を嬉しそうにヒクヒクと震わせながら。

「うくっ、そ、そこは……んんっ！」

「んふふふっ、いっぱい、んくっ、出たね。ぺちやつ、すごおい……」

表皮の上を湿った柔肉が這い回るだけでもくすぐったいの、さらに艶めかしい声で耳の中まで撫で回される快感に、胸の鼓動が天井知らずに跳ね上がってしまう。射精を済ませたばかりなのに、ペニスはますます力強く膨張していく。

「ふううー……やっぱり、一度ぐらいじゃまだまだ満足しきれないわよね。だから……」

すべてを舐め尽くして粘液の糸を引きながら一物を口から離すと、未だ衰えない亀頭をイタズラっぽい目付きで見つめながら沙夜子はベッドに上がり、湿ったショーツの股の部分を摘んでクイッと真横にずらした。

「今度は、いっしょに気持ちよくなりたい……」

「……あ……」

目の前に曝け出された、薄い茶髪に覆われたヴィーナスの丘。縦一文字にパツクリと割れたクレヴァスの中から透明な粘液が滴り落ち、真珠のように艶やかなピンク色をした肉壁がはみ出して、手招きするようにプルプルと痙攣している。

「大丈夫……ご心配、なさらずに……では……」

彼女の身を案じて震える声で呼びかける恭一に、麗華は軽くウインクして余裕のある口ぶりで答える。しかし痛みにかめかめがヒクヒク震えているのを、彼は見逃さない。

「やっぱり、やめようよ……」

破瓜の苦しきを見せようとしぬい彼女を氣遣い、彼は優しく呼びかける。

「やめる……冗談じゃありません。わたくし、そんなに柔な女じゃありませんことよ」
対する腹上のお嬢さまは、毅然とした態度で申し出を突っぱねた。

「……でも、そのお気持ち、とても嬉しいです。ありがとうございます、恭一さん」

キラキラと目を輝かせながらの、優しい口調のお礼を副^そえて。

（大丈夫なわけではない、はずなのに……そんなに、ぼくを……）
ずぶつずぶつずりゆつずる……

「んんっ、くっんっんんっ……」

痛みを堪え、心から自分を愛してくれる姿に感動する恭一の前で、麗華はゆっくりと腰を下ろし、みずからヴァギナの中へいきり立った一物を送り込んでいく。

はじめて男のモノを受け入れる肉のトンネルは奥へ行くほど狭まり、張り出したエラや太い胴を、ギユウギユウと締めつけてくる。同時に、やや固さのある肉襷を張りつけて包み込んでくる膣内は、ネットリと絡みついてきた沙夜子とは異なる快感を与えてくれた。

優しく撫でられるような、心地いい触覚を。

（はじめての女の子って、こんなに、きついんだ……）

「んんっ、はっ、はあああつつっ！」

ズプリユツッ！

「はあっはあっはあっ、み、見て……恭一さん。わたくし、あなたのすべて、受け止めましたわ……」

身を裂かれるような激痛を味わいながらも、麗華は健気に笑みを浮かべて身体を後ろに反らし、繋がった股間をよく見えるように前へ突き出す。

「う、うん……」

沙夜子よりアンダーヘアが薄いせいで、己が分身を突き立てた秘唇の姿がよく見えた。

（すごい……こんな風になっているんだ……）

はじめての時にはわからなかった、新鮮なトマトの断面のような肉の割れ目が、いきり立った肉槍を啜え込む姿。その美しさと艶めかしさは彼の興奮を高めるだけでなく、気丈なお嬢さまのもつとも大切なものを我が身に捧げてくれた献身ぶりを実感させてくれた。

……喜びに震える胸の奥底が、いきり立つ男根に負けないぐらい熱くなっていく。

「で、では……一生懸命、奉仕させていただきますわあ……」

まるで従順な新妻のように丁寧な口調で呼びかけながらお辞儀すると、麗華は再び足を

伸ばし、ゆつくりと一物を抜いていく。

「ううっ、こ、この感じ……す、すごく、いい……」

産道を後ずさりしていくペニスは、行きと違つてエラを下から撫でられるため、より強い刺激がビリビリと伝わってくる。その気持ちよさに、思わず恭一は気の抜けたような声を上げてしまう。

そして亀頭が抜ける寸前で、一気に腰を下ろして再び根元まで飲み込む。ゆつたりとしたピストン運動のはじまりだ。

グチャグチャギチユギチユ……。

野に咲くタンポポの香りをかき消すほど、甘酸っぱい香りの乙女の愛液を撒き散らしながら、彼女は徐々に膝の曲げ伸ばしのスピードを早めていく。

「んっんっんっんっ……ふっ、ふうっ、んっんっ、あっ、はっ、あうんっ！ き、恭一さあんっ、はあっ、こっ、こっちも……」

感極まった麗華は、切なげに喘ぎながらスーツのボタンを一つ一つはずして胸元を開いた。

そしてブラをずり下ろすと、恥ずかしさと興奮で薄紅色に染まった乳房が飛び出す。

(き、綺麗だ……麗華さんの、おっぱい……)

青空の下で、固く勃起した桜の蕾のような乳首を頂いた上質なシルクを髣髴とさせる柔

肌が妖しく波打つ姿に、つぶらな瞳が引き寄せられて離せない。

「む、胸が……おっぱいが、切ないのお……また、ぐにぐにしてえ……」

内耳を溶かしてしまいそうなほど熱く、そして甘ったるい声で訴えながら、彼女は恭一の手首を掴んで胸元へ引き寄せる。

ふにゅっ！

「わわっ……あ……」

手の平にパッと広がる豊満なバストの感触はフワフワと柔らかく、そして興奮と恥ずかしさに火照っていて、まるで蒸かしたての肉まんに押しつけたように感じられる。さらに指の間に挟まった乳首のコリコリとした固さがアクセントとなって、実に心地いい。

薄く汗ばんだ柔肌に手が吸いつき、揉み扱くたびにねちゅねちゅと湿った淫靡な調べを奏でた。

「い、いかがかしら？ んんっ、わっ、わたくしの胸は……」

「や、柔らかくて……んんっ、い、いい……気持ちいい握り心地、だよ……」

尻を下げた恥ずかしげな表情を浮かべながら、麗華は甘ったるい猫なで声で尋ねてくる。劣情心を激しくかき立てる彼女の姿を目の当たりにして、揉み扱く指に自然と力が入る。

ぐにぐに、ぐにゅぐにゅにゅっ……。

「ああつ、す、素敵……すごいですわあ、き、恭一さあん……」

張り詰めた男根でヴァギナの中をかき回されるのに慣れてきた麗華は、さらに快感を得ようと尻を左右に振ったり「の」の字を描いたりして、腰の振り方を変えてきた。同時に、張り詰めた肉棒を強く押さえたり優しく包み込んだりと、内股にかける力に緩急をつける。擦れあう秘肉の隙間からは快楽の雫が止めどなく流れ、膣内で振り回されるペニスにも、纏わりつく肉壁の締めつけや熱さが、皮下神経を撫で回すようにジンワリと染み込み続ける。ギリギリのところ踏ん張っている、精液を誘い出すように。

「き、キミも、すぐくキュウキュウして、ぐじゃぐじゃして……こつ、このまま、いつまでもキミの中……泳いでいたいっ、よおっ！」

粘液まみれの肉のトンネルの中を行き来するのがあまりに心地よくて、つい願いが口を突いて出てしまう。しかし麗華は、一刻も早く果てたいがために腰を振る速さを天井知らずに上げていく。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ、ぐりゅぐりゅぐちゅぐちゅ……。

「だっ、だめっ！ そんなにされたら……もっ、もう……出ちゃう。抜いて！ 麗華さん、抜いてえっ！」

興奮したお嬢さまの激しい肉体奉仕に、爆発寸前まで追い込まれた恭一は汗ばむ喉を震わせて、かすれた声で呼びかける。



「いつ、いいですわあつ！　あなたの子なら、身籠つても……だから、わつ、わたくしの中……はつ、はあつ、あなたの……あなたの子種で、いつ、いつぱいにしてええええええー！」

長いポニーテールを振り乱し、顎が天を向くほど喉を反らして麗華は喘ぎながら恭一の下腹部の上で跳ねまくる。

ぐっちやぐっちやぐちゅぐちゅ……。

繋がった秘肉から漏れる愛欲の狂想曲が、求めあう二人の喘ぎ声を消し去りそうなほどの大音量でタンポポ畑に響き渡った。

「イクッ……はじめて、はじめてなのに……イツ、いつちやううううーつつつつつ！　きつ、恭一さあああーんつつつつつ！」

「ぼ、ぼくも……また、で……で……で……るつ、れ、麗華さあああーんつつつつつ！」

ドビシユウウウウーツツツツ！　ドクツドクツドクツドクツツツツツツツツ……。
プシュツ、プシヤアアア……。

互いの名を呼びながら、二人は愛欲の証を迸らせる。繋がった秘肉の隙間から、膣内に収まりきらないほど噴出した精液と愛液のカクテルが、タラタラと滴り落ちていく。

「はあつはあつはあつ……き、恭一……さん……」

力を使い果たし、前のめりに倒れかかった麗華は咄嗟に眼下に横たわる愛しい人の両肩

の脇に両手をついて、腕立て伏せをするような姿勢で身体を支える。

「ふうっ、はあっ……なっ、何？」

「わっ、わたくしも……許嫁候補に……なれますわよね？　なれないなんて言ったら、ゆっ、許しませんわよ……」

愛する人に我が身を捧げるしおらしい女の子から一転して、元の強気なお嬢さまに戻ったような口ぶりで麗華は問いかけてくる。しかし強気なようであり、言葉の端が弱々しく震えていた。今まで冷たくあしらっていただけに、返事を聞くのが不安らしい。

それでもこちらをまつすぐに見つめる黒い瞳には、自分を愛して欲しいという願いが込められていて、力強さが感じられる。

「えっ!?　う、うん……もちろん、だよ……」

激しい痛みを伴いながらも自分を愛してくれた思いと、胸を射抜かれるような真剣な視線に心動かされ、恭一はつい彼女の願いに応えてしまう。

「あはっ！　う、嬉しいですわ……恭一さん……」

彼の言葉に感激した麗華は、ヴァギナの中に一物を残したままうつ伏せに倒れ込み、頬を擦りあわせながら耳元で甘く囁いた。思いを伝えられたことを祝うように集まってきた、タンポポ畑の小さな住民達に見守られながら。

はじめた。

「んふふっ、やつぱりキョウちゃんのとって、美味しいわあ……」

「お、お母さま。いくらお母さまでも、それは許せませんわ！」

柔肌に浴びた愛しい人の愛の証を独り占めさせまいと、麗華が沙夜子に詰め寄る。

ぺろぺろ、ちゅぷちゅぷ……。

「うふっ、すごく濃いのがいっぱい出て、ステキですわあ♥」

こちらに恥ずかしげな視線をチラチラと送りながら、彼女は母の顔についた白液をペロペロと舐めてとる。まるで自分になっついていて、よく顔を舐めてくる子ネコのように。

「あらあら、そんなところに付けちゃって……もったいないわよ」

つるっ、ぺちゅぺちゅぺちゅ……。

自分の顔を舐める娘の顔についたスperlマを、沙夜子は逆に舐め返す。顔を近づけ、互いに舐めあう美人母子の姿は、まるで女同士の淫らな関係を髣髴とさせるほど色っぽく、そして美しい。つい瞬きするのも忘れるほど見惚れてしまう。

しかしミリアは、母の顔に浴びせられた精液には見向きもしない。

「んふっ。甘いね、麗華お姉ちゃん。まだ、こっちにも残ってるのに……」
ばちゅっ、ちゅくちゅくちゅく……。

「わわっ、ミ、ミリア……ちゃん……」

母と姉に氣をとられる彼を惹きつけるように、亀頭をほおばってエラの下や先割れに溜まったスペルマを舐めとっていく。

「くううつ、ま、また……あ、あれ？」

「んく、んくんく……ぶはあつ」

あいかわらずの卓越した舌使いで、まだ固さを失っていない肉柱の中に痺れるような刺激を注入するが、彼女は早々に口を離す。おかげで少し拍子抜けしてしまった恭一の前で、新たな愛の宴の準備がはじまった。

「な、何？」

一人ずつ背を向けて彼の前に歩み出ると、右から沙夜子、麗華、ミアアの順でタイルの上に四つんばいになる。もちろん、お尻をこちらへと向けた格好で。

「さーて、キョウちゃん。今度はあなたの番よ」

「わたくし達のこと、気持ちよくしてくださいましね」

「えへへへ、ミアアのお尻、可愛いでしょ？」

三人揃うと、やはり一番肉付きのいい身体をした沙夜子のヒップの大きさが際立って見える。桃尻と言うよりは、熟れた瑞々しいスイカのように。恥ずかしげに身を軽く振るだけでプルンプルンと揺れるほど柔らかいが、自重で歪むこともない程度の張りがある。

(あんなに揺れて……すぐく、柔らかかそう……)

二番手の麗華は大きさでは劣るものの、左右均等に洋梨型に張り出したバランスのよさは沙夜子より勝っている。それに余計な脂肪がなく、全体的に引き締まったシルエットを形作っていて、色つぼさとともに精悍な美しさが感じられた。

(やっぱり、乗馬が趣味だから鍛えられているのかも……)

そして三番手のミリアのヒップは両手に収まってしまいかと錯覚するほど小振りで、まだ熟しきらない青い果実といった感じで可愛らしい。しかも彼女は母や姉より身体が未熟なのを補いたいのか、必死にアピールしてくるので、少々目のやり場に困ってしまう。

(き、気付いてないのかな？ ミリアちゃん……)

懸命にお尻を突き出すたびに双曲の谷間がパカパカと開き、その奥に隠された紅色の菊花まで顔を覗かせてしまいかねない。

ズラリと並んだ、いずれ劣らぬ美人母娘の尻。その魅惑的な姿が、異性に興味津々の年頃の少年の心を鷲掴みにする。

ヒップの下で、愛しい人の雄蕊の訪れを待ちわびて咲き誇る鮮やかな肉花。すでに目にしたその姿も、並んで見比べると違いがよくわかった。

薄い金髪の下に、縦一文字に綺麗な筋を走らせるミリア。

荒い呼吸に合わせて激しく開閉し、必死にアピールしてくる麗華。

そして大輪の花のように、薄紅色の艶やかな肉襞をはみ出させた沙夜子。



(あれ？ 何か……前とちよつと違うような……)

初体験の時より花卉の幅が広がって見えるように見えて、恭一は思わず凝視してしまう。「わかった？ あなたにもつとよく見て欲しくて、少し剃ったのよ」

目尻を下げた恥ずかしげな表情で、若奥さまは恥ずかしいお手入れをしたことを告げる。その可愛らしさと艶めかしさが入り混じった姿に、彼の胸は激しく高鳴り続ける。

こちらを振り向いて寵愛を求めてくる様子も三者三様で、それぞれに性格があらわれていた。

「さーて、誰を一番に選ぶのかしら？ キョ・ウ・ちゃん……」

あからさまに「もちろんわたしよね」と訴えるような余裕のある笑みを浮かべ、落ち着いた口調で呼びかけてくる沙夜子。

「……わっ、わたくしからじゃないと……許しませんことよ……」

麗華は強気な口調でアピールしてくるものの、その表情はどことなく照れ臭そう。やはりプライドの高い彼女のこと、いくら好きな人のためとはいえ、お尻を向けて馬のように四つんばいになるのが恥ずかしいに違いない。

「恭一お兄ちゃん。はやくっはやくっ……」

そして無邪気な笑みを浮かべておねだりしてくるミリアは、まるで目の前に並んだお菓子に夢中な子供のように可愛らしい。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武將の名を持つ美少女達が淫らにバトル!!

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 参
信玄、出陣!!
【小説：斐野嘉和 / 挿絵：SAIPACO】

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩獵者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が特選のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
【小説：夜土郎 / 原作挿絵：渡瀬行人】



ピルグリムメイデンII 白装の騎士
【小説：狩野景 / 挿絵：ほちん】

2010 3月 下旬
発売予定!!



不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガツ! ①～②
- 悪者即ちアダム ①～②
- 格闘! 帝部少女探偵団 赤い謀略を撃て!

- 借金お嬢小姐 ①～②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の船騎士がDMC目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の湖に聖女

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

